



ツツジの名所大森山の登山道整備を行う上津谷川自治会

登山道整備で内外と交流

室根町の大森山(760m)は気仙沼湾や室根山などが眺望できる、ヤマツツジの名所です。ヤマツツジが満開を迎えるころ、県内外から多くの観光客が訪れる同山。地元の上津谷川自治会(及川晴道会長、67世帯)は、平成5年から自治会員総出で山頂の下草刈りや登山道の整備を行っています。中腹にはあずまや、山頂に花見やぐらを設置するなど、訪れる観光客に配慮。自治会はもちろん、他地域からも多くの参加があり、交流の機会になっています。



19年夏至の日、花と泉の公園で行われたキャンドルナイト

キャンドルの炎に願いを

「でんきを消して、スローな夜を。」をキャッチフレーズに、夏至と冬至の日に電気を消して過ごそうと呼び掛ける「100万人のキャンドルナイト」。この全国的に行われているイベントが、市内ではNPO法人グリーンハート(高橋利巳理事長)の呼び掛けで、平成17年から行われています。「地球温暖化防止を考えるきっかけにしてほしいと行っています。環境だけでなく家族、平和など、暗闇の中で大切なことを考えてもらえれば」と高橋理事長。今年の冬至、あなたも参加してみませんか。



公園整備時にはのり面に住民と社員と一緒にシバザクラを植えました

「養子縁組」で公園管理

施設を養子と見なし、住民や企業が『里親』となり、定められた施設を責任を持って維持管理を行う「アドプト」(養子縁組)制度。千厩町で貴金属を中心とした資源リサイクル業を行っているニッコー・ファインメック(株)は平成19年9月、市と協定を結び、「千厩おくたま親水公園」の草刈りや清掃などの維持管理を行っています。「創業から35年、地域に育てていただいた恩返し。企業市民としての社会貢献活動であるとともに、社員が地域の一員である実感できる場にもなっています」と同社の小野寺司代表取締役は語ります。

参画を進める

「まちのためにできること」「みんなのためにできること」を身近な分野で実践している皆さんを紹介します。「協働のまちづくり」に参画することは難しくありません。すぐに取り組めることから始めてみませんか。

協働は、近年各地が模索しているまちづくりの手法です。現在の私たちの暮らしに目を向けてみると、過疎と高齢化、一人暮らし高齢世帯の増加、子育て、災害、環境問題、地域産業の衰退など難しい課題に直面しています。そしてこの中には、行政だけでは解決できないものが多く含まれています。ご近所の人間関係こそが力を発揮しそうなもの、志縁といわれるNPO、あるいは事業者などの力を借りることによって解決できるものなど、住民相互のさまざまな関係づくりが可能性を広げていきます。また、一関市のような合併自治体では、その多様な地域性に照らした時、行政と地域・団体の新たな関係も求められます。各地では、住民、行政双方によるこうした協働への高い関心と実践が進んでいます。こうした関係をつくるには、自分の組織・団体として「できること」と「できないこと」への認識が不可欠です。自らの課題や特性を理解していなければ、周囲と力を合わせようとは思わないでしょう。地域も同様です。自分たちの地域の課題や魅力を、まずは住民自らの言葉で語り合える地域にしていくことが協働への第一歩です。従来からの地域リーダーに加え、若者も女性もよそ者も、皆が地域のこれから自由に語ることでできる場づくりが重要です。それはまた、実に楽しいプロセスでもあります。地域にまだ顔を出さ



高崎経済大学地域政策学部准教授 櫻井常矢さん
当市の協働のまちづくりの「市民講演会」やワークショップで講師を務めているのをはじめ、各自治体で協働のまちづくりをサポート

新たな社会の豊かさを はぐくむ協働のまちづくり

に在る多様な意見やアイデア、人材、情報などを見いだしながら、地域づくりを新たな段階へと進めることを意味するからです。まちづくりは、行政だけで進めるものでもありません。かといって、住民やNPOだけで担うものでもありません。だれかの独占物ではないのです。「まちはみんなで作るもの」。とてもシンプルで分かりやすい、しかしそう簡単には実現できないこのことを、今の時代に生きる私たちだけではなく、この一関を担う次の世代にも引き継いでいこうではありませんか。そうした地域への愛着と誇りを、世代を超えて積み上げていくその厚みこそが、これからの社会の豊かさの一つとは言えないでしょうか。ともに楽しくこの歩みを進めていきましょう。

未来につなげる

「協働」という言葉に対するイメージはさまざまです。市民と学識経験者からそれぞれが考える「協働のまちづくり」を聞きました。これをヒントに、皆さん一人一人の行動につなげていきましょう。

社会とかかわるのは面白いことです。東山町に住んで以来、「周りが良くなると、自分も良くなる」と農業や地域のさまざまなことにかかわってきました。生まれは関西ですが、大阪では百貨店でも値切るのが当たり前。東北の人は、失敗を恐れて我慢しているような気がしません。



協同組合産直センターひがしや理事長 前田眞さん=東山町田河津=平成3年東山町に1ターン後、リンゴ園を営む。東稲自治会長。まちづくりスタッフバンクに登録し市行財政改革推進審議会委員など務めている。

失敗を恐れず行動に移し 地域を面白くできれば

地域を運営する上で、年配の方はどうしても昔からのしがらみがあります。わたしはよそ者なので、あえて波風を立てて新しいことに挑戦するきっかけになればと思い行動してきました。産直にかかわっていますが、産直は努力が目に見えます。工夫を重ねることで、70歳のおばあさんでも、時には1日10万円稼ぐこともあります。地域のことにしても同じ。これまでは行政に大きく頼ってききましたが、今後は自分たちが考えて行動しなければならぬことが増えるでしょう。最初から完璧な結果を求めず、失敗しても学んだことを次に生かせばいいはず。楽しみながら、さまざまなことにアンテナを張ることで、地域を面白くしていければと考えています。